# 花見

児玉　寛嗣

新型コロナ感染症の流行で花見の様子が様変わりした。桜並木を上を見上げて花を愛でながらそぞろ歩き、時々立ち止まり、花をバックにスマホで自撮りするというパターンがすっかり定着したようだ。桜の木たちは花の下でのバカ騒ぎをなぜ止めたのかと不思議に思っているだろう。

桜と言えば、淡いピンクの五弁の花を咲かせるソメイヨシノが最もポュラーだ。ソメイヨシノはＤＮＡの調査から江戸時代、駒込村（現在の巣鴨の染井霊園辺り）の植木職人が交配によって編み出した新種にルーツがあると言われている。従って歴史は意外に浅い。そこから接ぎ木によって日本中に広まっていったようだ。

冬が終わって暖かくなり外を出歩きたくなる季節になると、桜は一斉に開花する。日本人はことのほかこの花が好きなようである。

日本人に好かれる理由は三つあるように思う。一つは、一斉に咲いて一斉に散ること。それは特異性を嫌い一様性に居心地の良さを感じる国民性にあっているようだ。二つ目はその色。強烈な原色ではなく淡い色合い、控えめを旨とする日本人に好かれるのだろう。三つ目は、咲いてから散り、若葉が芽を出すまでの早さ。この短さは熱し易く冷めやすい日本人の気脈に通じるものがあるのだろうか。

上野公園で夜桜見物をすることが恒例になっていた。場所取り係は会社を早めに抜け出して公園へ行き、ブルーシートを敷いて場所を確保する。場所は皆が迷わないようにと、例年、正岡子規記念球場の裏と決まっていた。仕事を終え会社の近くで、酒やつまみを買い求めて公園に行く。退職した者も顔を見せた。花を愛でるのは最初だけ、すぐに酒盛りが始まった。ぼんぼりの消灯時間の八時までの束の間の宴会であった。

「コロナが落ち着いたら花見を再開する」とコロナ騒ぎの始まった頃に幹事から連絡があった。しかし、早々と東京都から宴会禁止のお達しがあり今年も見送りとなった。コロナ禍の花見も風情があってよいが、以前の花見がやはり懐かしい。